

# 低学年児童期の 学習

～保護者のみなさまへ～



## 第3回

音読は「読む力」を育むための重要なステップ



子どもの読解力不足に関する相談は、4年ごろから増えてきます。それは、4年生頃に学習全般の難度が上がって抽象性の高い言葉が多数扱われるようになり、「うちの子はちゃんと問題文が読めていないのではないか？ 語彙が足りないのではないか？」とお気づきになるからでしょう。実は、この段階で気づくのはやや遅いと言わざるを得ません。読みの力は一足飛びには向上しません。いっぽう、勉強の内容は高学年から一気に難しくなります。読みの力を巻き直そうとがんばっても、勉強の進度がはやくて常に後手を踏むことになりがちです。



ところで、一般的に「文章を読む」というときの読みは黙読のことを意味します。大人なら、文章の流れを目で追いながら瞬時に黙読で著述内容を理解できます。しかし、子どもは初めから黙読できるわけではありません。そもそも、人間が長い歴史のなかで文字言語を得たのはつい最近のこと（たとえば、日本で文字が普及し始めたのは平安時代頃です）で、何万年もの長い間、言葉と言えは音声の言葉のみでした。したがって、音声の言葉を理解する脳内中枢（ウェルニッケ野）は生まれながら脳に埋め込まれていますが、文字の言葉を理解するための中枢は存在しません。では、文字言語を目でとらえて理解できるのはなぜでしょうか。それは、文字列を目で追いながら、脳内でその文字の読みの音声をイメージすることで著述内容を理解しているからです。つまり、文字言語を音声言語に変換しているわけですね。

a ru hi...





この「視覚による文字情報の入力 → 文字情報を音声情報に変換 → 著述内容の理解」という脳内作業がスムーズかつ正確にできるようになるためには、文字の一つひとつに対応する音を声に出して照合する練習を一定期間繰り返すことが必要です。そうしているうちに、「ひ・ま・わ・り」と1文字ずつ区切って読んでいた段階から、「ひまわり」と言葉のまとまりを識別した読みの段階へ移行し、さらに声に出さず脳内で音声の言葉に変換して読む黙読段階へ進んでいきます。その時期は、一般に小学校の2年生になる頃だと言われています。黙読は音声を伴わないので快適ですから、音読経験をしっかり積んだ子どもは、読書を快適に楽しめるうえ、新しい語彙をどんどん増やしていく流れをうまく築くことができます。いっぽう、音読経験が足りない子どももいます。問題なのは、そのことに保護者がお気づきにならないケースが多いということです。



本コラムをお読みの方々は、随分早くからお子さんに文字を教えておられたことでしょう。たとえば、表に朝顔の絵が描かれ、裏に「あ」と印刷された積み木のような教具を使い、おかあさんが「あさがおの“あ”」などと手本を示し、それをお子さんに反芻させながら、文字学習の第一歩をサポートされたのではないのでしょうか。おそらく、3～4歳頃には絵本を楽しめるようになり、さらに5歳前後にはかなりの文字量の本を楽しめるようになられたことでしょう。ただし、この年齢ではまだ達者な黙読には至っていません。なかには挿絵などを頼りに筋立てを楽しむだけの読書をしている子どももいます。親は、「もう読める」思っている、実際には読みの力が未熟な状態のままの子どもが相当数いるのが現実です。

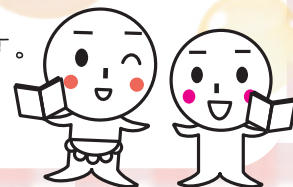


おたくのお子さんの読みの力はどんな状態でしょうか？ 前回のコラム記事でもお伝えしましたが、まずは**現在の読みの状態**を確かめてみましょう。教科書か児童書の1ページを、お子さんに音読させてみてください。すぐ躓いたり誤読したりするようなら、黙読も不完全でちゃんと読めていません。なぜなら、文字列を見て瞬時に声に出して読めなければ、文字列を目でとらえた瞬間にその読みの声をイメージすることなど到底できないからです。読みが不正確で手間取ると、同じ文章を読んでも読了に時間がかかるうえ理解も不十分ですから、勉強しても成果があがらず、テストのような制限時間内で正解を得る競争においても後れを取ってしまいます。音読が上手になってこそ、黙読もしっかりしてきます。音読を繰り返し練習することをお勧めします。





「音読の繰り返し→黙読の基盤形成」の流れを踏まえ、弊社ではジュニアスクールに入会されたご家庭のお子さんに、「音読練習帳」を配布しています。これは、良質の子ども向けの物語を編集作成したもので、楽しく読みの練習をすることができます。学年に応じて、一文ずつ、あるいは段落ごとに親子交替で読んでみてはいかがでしょうか。おかあさんの手本となる読みを聞いて、「自分ももっとうまくなりました！」という欲求を胸にお子さんがんばるでしょう。それを聞いておかあさんがほめる。このくり返しで、知らず知らずのうちにお子さんの読みは上達していきます。楽しい時間になるし、お子さんの読みは確実に上達していきます。



ときどき、「うちの子は本が嫌いです」とおっしゃるおかあさんがおられます。しかし、はじめから読書を嫌う子どもなんていません。多くの場合、黙読がスムーズにできなくてストレスになることで本を読むことを嫌がっているのだと思います。うまく黙読に移行したお子さんは、例外なくいろいろな本を手にするようになります。この流れを築いていきましょう。そうすれば、勉強の手段としての読みの力も整っていきますから、小学校課程の学習の流れにも乗っていけるでしょう。親子で楽しい音読練習を励行しましょう！



右の表は子どもの語彙数の発達状況を研究した学者による資料です。小学校入学時の子どもの語彙数と卒業時の語彙数には大変な開きがあります。これだけの成長を促すうえで、読みの能力を磨くことは必須と言わざるを得ません。

語彙の増加の様子をたどると、語彙増加率が最も高いのは10歳のときで、増加数が最も多いのは11歳のときです。この現象を「語彙の爆発」と言いますが、このような急激な語彙の発達を可能にするのは、低学年期のしっかりとした読みの態勢づくりです。まずは音読練習をみっちりやり、黙読をスムーズかつ効果的にこなせるようになりましょう。そこから学力の大成に向けた大いなる展望が開けていきます。

語彙数の変化

(阪本一郎)

年齢(歳)	語彙量	年間増加量	増加率
6	5,661	1,039	18.4%
7	6,700	1,271	19.0%
8	7,971	2,330	28.9%
9	10,276	3,602	35.1%
10	13,878	5,448	39.3%
11	19,326	6,342	32.8%
12	25,668	5,572	21.7%
13	31,240	4,989	16.0%
14	36,229	4,233	11.7%
15	40,462	3,457	8.5%

